音楽理論２

～音階を理解しよう～

Miyama Yuki

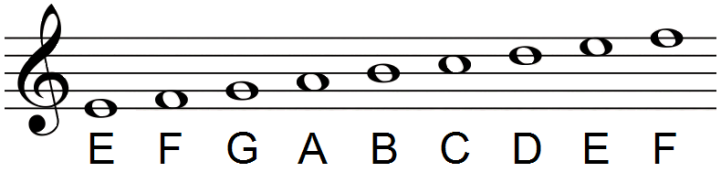
音部記号

五線譜には必ず一番左に音部記号（おんぶきごう）というものが表記されてあります。音部記号が変われば同じ場所に書かれた音符でも音の高さは変わってきます。当然のことながら音名も変わります。音部記号は楽器によって使い分けられています。五線譜の一番左に表記されてあります。メロディを譜面におこす時に、ト音記号やヘ音記号を書かなければならない場合があるかもしれません。

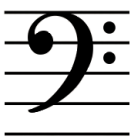
⇒【ト音記号】 Treble Clef (G Clef)

ト音記号はギター、アルトサックス、ピアノの右手など
高い音が鳴る楽器で使われます。
なので、高音部記号（こうおんぶきごう）とも言われます。
ピアノでは、主に右手で弾きます。

ト音記号は
Gの音
（日本語音名ではト）→
から書き始めるので
ト音記号と言います。



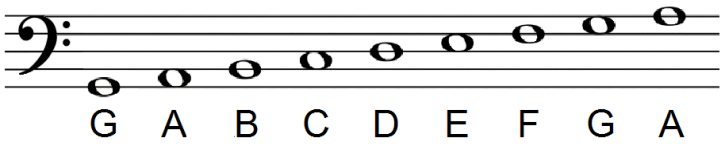
第三間にCがあります。



⇒【ヘ音記号】 Bass Clef (F Clef)

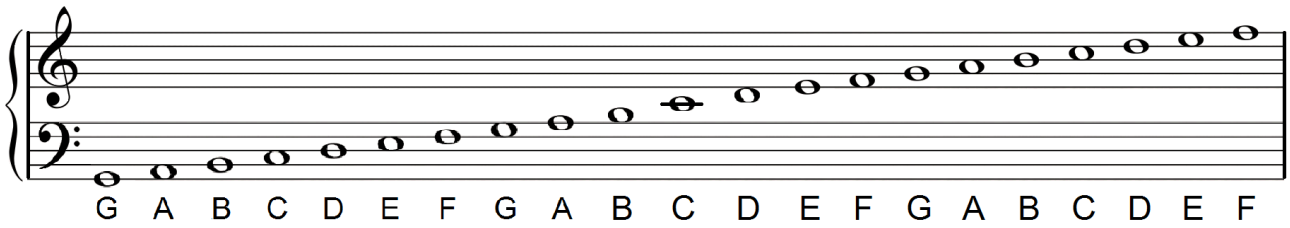
ヘ音記号は、ト音記号のようにギターや
アルトサックスの高い音が鳴る楽器とは逆に、
低い音が鳴る楽器で使われ、
エレキベースやチェロなどがヘ音記号で表されます。
よって、低音部記号（ていおんぶきごう）とも言われます。
ピアノでは、主に左手で弾きます。

ヘ音記号は
F の音
（日本語音名ではヘ）→
から書き始めるので
ヘ音記号と言います。



第三間に C があります。

大譜表



ト音記号は高い音を表すために使われ、ヘ音記号は低い音を表すために使われます。
その2つの音部記号が連なっている譜面があります。

上のような譜面がそれになります。
このト音記号とヘ音記号が連なった譜面を大譜表（だいふひょう）と言います。

なぜこのような譜面になるかと言うと、ピアノなどの鍵盤楽器では音域が広範囲におよぶので、どちらか1つでは表せないことがあるからです。
中心の「ド」の音は同じ音にります。

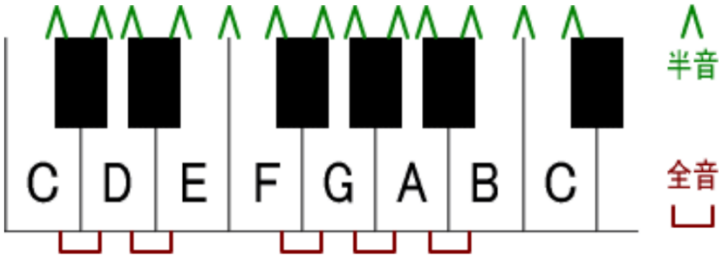
それぞれト音記号とヘ音記号の第2間の音符を見てみましょう。

ト音記号の音は「A」、ヘ音記号の音は「C」になります。
先ほども書きましたが、音部記号が変わってくると同じ場所に記入された音符も音が変わります。

繰り返しになりますが、楽器によっても音部記号は使い分けられます。
ギターなどの高い音はト音記号、エレキベースなど低い音はヘ音記号です。
2つの音部記号が読めればとても良いですが、大譜表を扱うピアニストでさえ中々スラスラ読めるものではありません。
なので、まずは自分の楽器で使われている音部記号から覚えるといいでしょう。

全音と半音と音名

ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの全音と半音



音階(おんかい)には全音(ぜんおん)と半音(はんおん)というのがあります。例えば、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階にも全音と半音があります。上のピアノの鍵盤を見ると分かりやすいので、一緒に見ていきましょう。

C と D の間が全音です。その C と D の間にあるのを黒鍵(こっけん)と言います。C からその黒鍵までが半音になります。D と E の関係も全音になります。次の E と F も全音と思いそうですが、これは半音です。ピアノの鍵盤を見てもらうと分かりますが、E と F の間には黒鍵がありません。なので半音になります。同じように、B と C の間にも黒鍵がないので半音になります。

C・D・E・F・G・A・B と ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド

よく、楽譜には、C・D・E・F・・・・というようなアルファベットを見ると思いますが、
これらには、三つの種類があます。

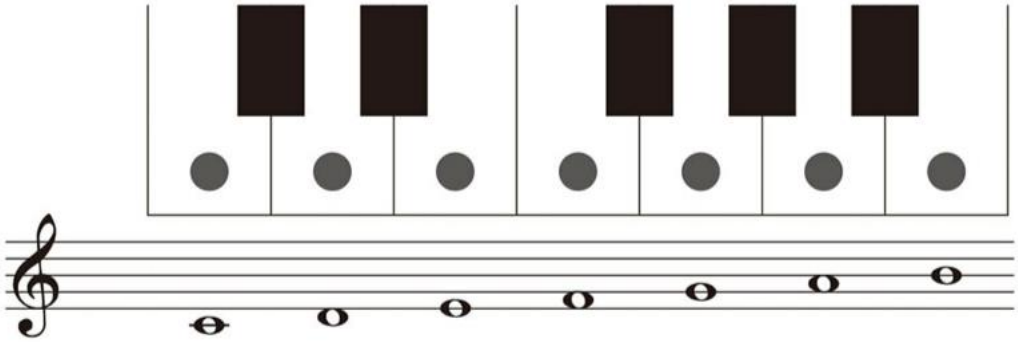
＊音名

＊調(キー)/音階(スケール)

＊和音(コード)

音名の【C】は、上の表にあるように、ピアノで言えば二つの鍵盤の左下にある音の事です。
楽器によって音色は違いますが、他の楽器も全部同じです。単体の音です。
音階の【C】は、C の音から始まる、音の階段の事です。
この音階にも【C】だけでなく、いろんな種類があり、それぞれ名前があります。
和音(コード)の【C】は、C の音を土台とした複数の音が混ざった音です。
ギターなどで、6 本の弦をいっぺんに弾いた時に出る音などがそれです。
これらの事を詳しく見ていきましょう。

音名



ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・と左から順番に並んだ音符です。
日本でも親しまれている「ド・レ・ミ」の呼び方ですが、この呼び方はイタリア語なんです。
日本にはまた違った呼び方があります。イタリア語、英語、日本語と見比べてみましょう。

日本語	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
英語	C シー	D ディー	E イー	F エフ	G ジー	A エー	B ビー
ドイツ語	C ツェー	D デー	E エー	F エフ	G ゲー	A アー	H ハー
フランス語	Ut ユト	Ré レ	Mi ミ	Fa ファ	Sol ソル	La ラ	Si シ
イタリア語	Do ド	Re レ	Mi ミ	Fa ファ	Sol ソル	La ラ	Si シ

日本語では「ハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロ」と言います。親しみがないので扱いづらいと思ったら日本語音名は覚えなくていいと思います。でも、イタリア語と英語の呼び方は覚えておきましょう。特に、英語音名のアルファベット表記は和音（コードネーム）を読むときに便利なので、是非覚えておくことをお勧めします。実際に、ジャズやポップスのプロミュージシャンは英語音名で覚えている人がほとんどだと思います。理論では「C・D・E」の英語音名で考え、発音する場合は「ド・レ・ミ」のイタリア語音名を使う人も多いようです。英語音名の始まりの音は「C」からなので注意しましょう。

●シャープがついた場合

日本語	嬰ハ	嬰ニ	嬰ホ	嬰ヘ	嬰ト	嬰イ	嬰ロ
英語	C♯ シーシャープ	D♯ ディーシャープ	E♯ イーシャープ	F♯ エフシャープ	G♯ ジーシャープ	A♯ エーシャープ	B♯ ビーシャープ

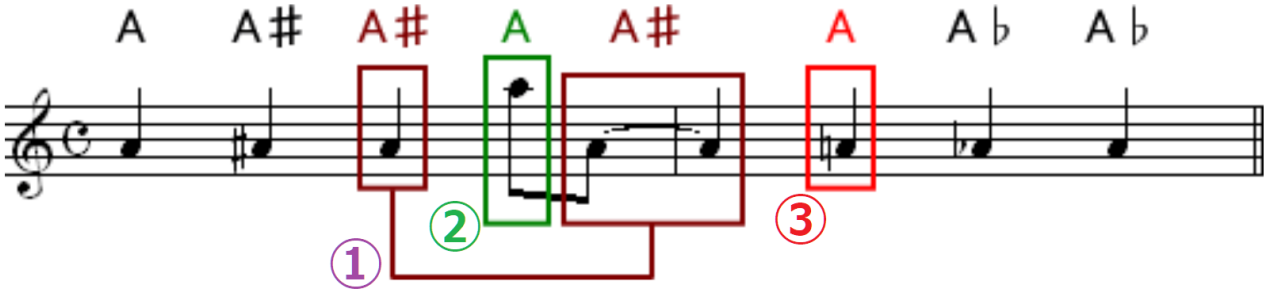
●フラットがついた場合

日本語	変ハ	変ニ	変ホ	変ヘ	変ト	変イ	変ロ
英語	C♭ シーフラット	D♭ ディーフラット	E♭ イーフラット	F♭ エフフラット	G♭ ジーフラット	A♭ エーフラット	B♭ ビーフラット

臨時記号

記号	読み	意味
♭	フラット	半音下げる
♯	シャープ	半音上げる
♮	ナチュラル	元の音にもどす
𝄫	ダブルフラット	全音下げる
𝄪	ダブルシャープ	全音上げる

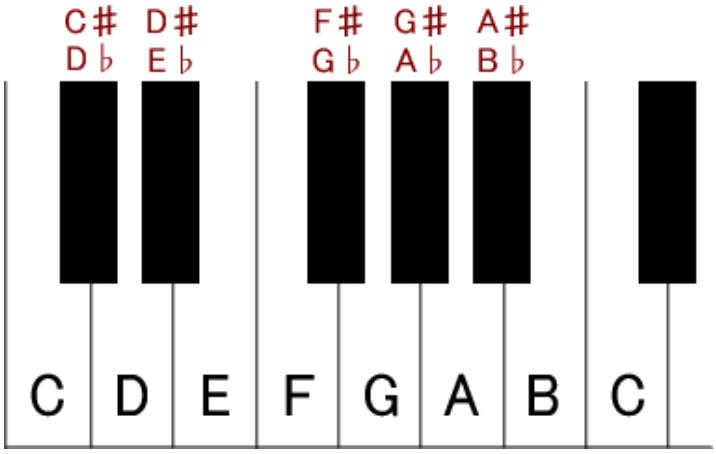
音符にアレンジを加えてやるものを装飾音(そうしょくおん)と言います。
音を半音下げたり、半音上げたりする記号を臨時記号(りんじきごう)と言います。フラット、シャープ、ナチュラルはよく譜面で見られると思いますが、ダブルフラットとダブルシャープはあまり出てこないと思います。ダブルとあるように、半音＋半音＝全音を上げ下げします。臨時記号にも決まりごとがあるので、次の譜面を見て確認してみましょう。



同じ小節内では1度シャープやフラットが付くと次からは省略されます。しかし、オクターブが違うとシャープやフラットは付かず、記入された音のままです。臨時記号の効果は1小節で終わりですが、次の小節にナチュラル記号がふってある譜面もあります。順番に見ていきましょう。

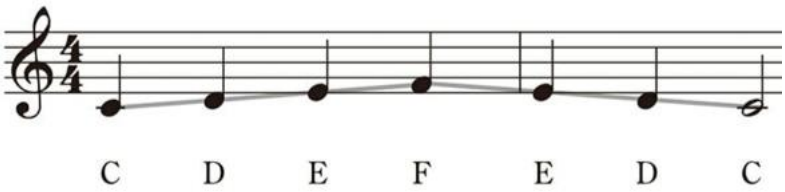
①の□の音は同じ小節内のため(タイで結ばれた音も)シャープが省略されています。
②の□の音はオクターブが違うのでシャープはつきません。
③の□の音は本当ならシャープの効果は消えているためナチュラルをつける必要はありませんが、上の譜面のようについてある譜面もあります。

異名同音



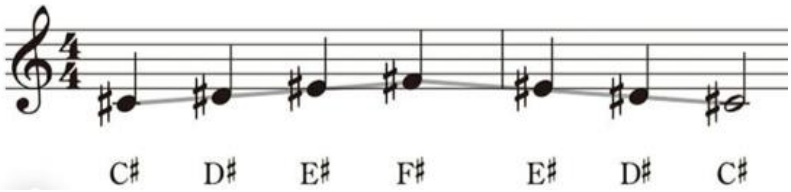
C を半音上げると C♯で、D を半音下げると D♭になります。上のピアノの鍵盤を見てもらえば分かりますが、この C♯と D♭の音は同じ黒鍵にあります。また、E と F の間には黒鍵がありますが、書き方によっては、F の事を E♯と書くことがあります。それは、E から半音あげた音が F になるからです。このような違う表記のされかたで、同じ高さの音のことを異名同音（いみょうどうおん）と言います。

ストーリー（メロディー）



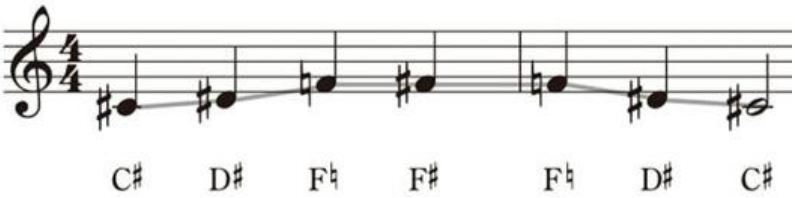
ストーリーというのは、メロディーの事です。音の高さを線でつないだ時の形のようなものです。

上のメロディは、カエルの歌です。この音を、全て半音ずつ上げる（♯を付ける）と、

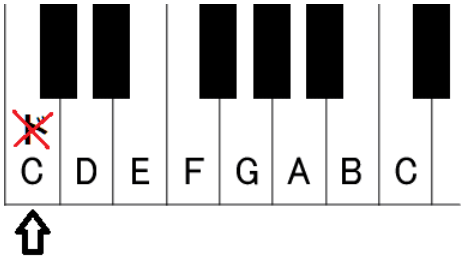


こうなります。これは、カラオケでキーを一つ上げた状態です。

しかしこれを、下の図のように【E♯】を異名同音の【F】にしてしまうと、形が変わってしまいます。なので形が変わらないように、異名同音に書き換えることがあります。キーによって異名同音のどれを使うかが決まるのです。



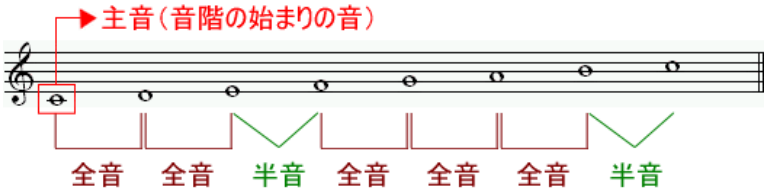
音階

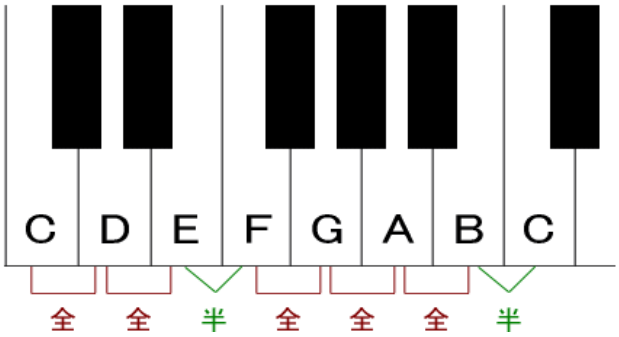


左の図の鍵盤の一番左の C の事を『ド』だと思われていることが多いのですが、『ド』はそこだけとは限りません。間違いではないのですけど、どの音でも『ド』になることが出来ます。「ド」は長音階の始まりなので、例えば(C メジャースケール)ハ長調は C、G メジャースケール(ト長調)は G が、「ド」になれると言う事です。
これを理解するには、いまから学ぶ音階を理解する必要があります。

長音階(メジャースケール)の並び

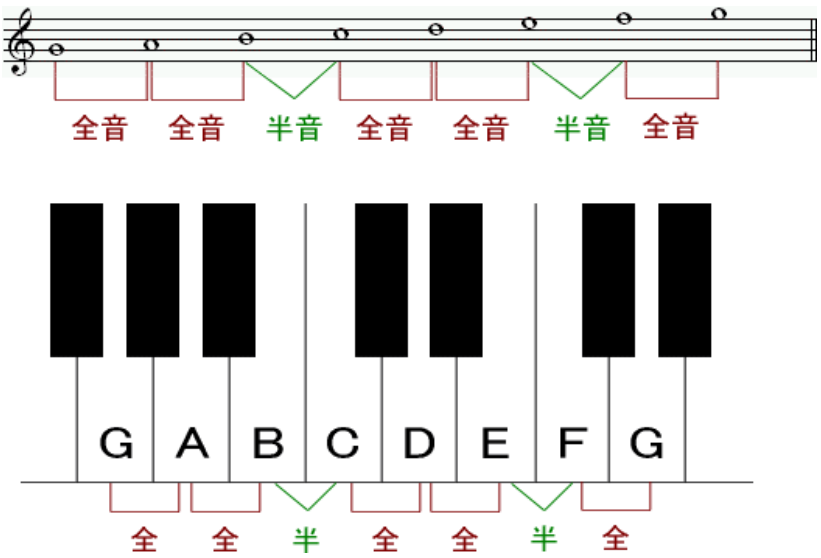
誰もが1度はピアノで弾いたことのあるド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドも音階(おんかい)のひとつです。普段聴いている曲は、この音階を土台にして作られています。音階にも種類があり、このド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドを長音階(ちょうおんかい)と言います。ちなみに、長音階を英語で書くと長がメジャーで音階がスケールなのでメジャースケールとも言います。どちらかというと長音階よりメジャースケールと呼ばれる方が多いような気がします。





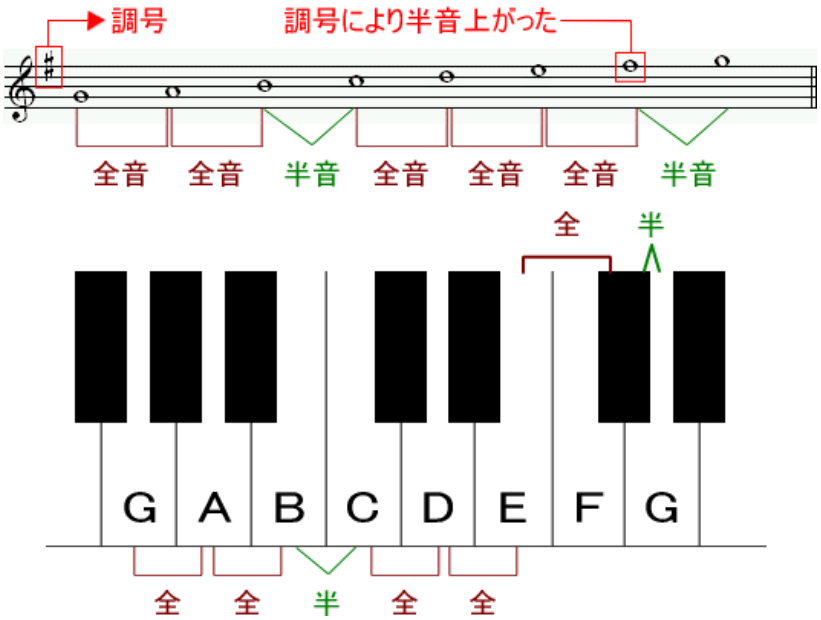
長音階の並びは楽しく明るい雰囲気を特徴とします。音階の始まりの音を主音(しゅおん)と言います。上の譜面は C の音から始まっているので、C メジャースケール(ハ長調)になります。長音階の並びには決まりがあり、上の譜面にもあるように全音－全音－半音－全音－全音－全音－半音という並びです。この決まりに従えば、D の音から始まる D メジャースケール(二長調)や、E の音から始まる E メジャースケール(ホ長調)の長音階を作ることができます。
そのためには前のページで見てもらった♯や♭が必要になってきます。C メジャースケール以外の音階を作ってみましょう。

G メジャースケール



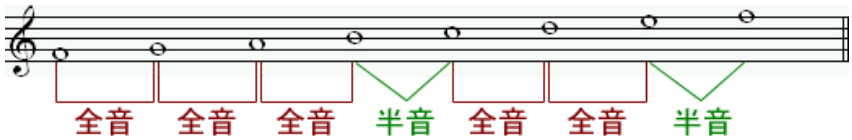
G メジャースケール(ト長調)を作っていくことにします。G メジャースケールなので主音は G になります。でも、このまま G から順番に白鍵(はっけん)を弾くだけでは長音階にはなりません。なぜなら、左の譜面を見てもらえば分かるように、全音と半音の並びが長音階の並びではないからです。

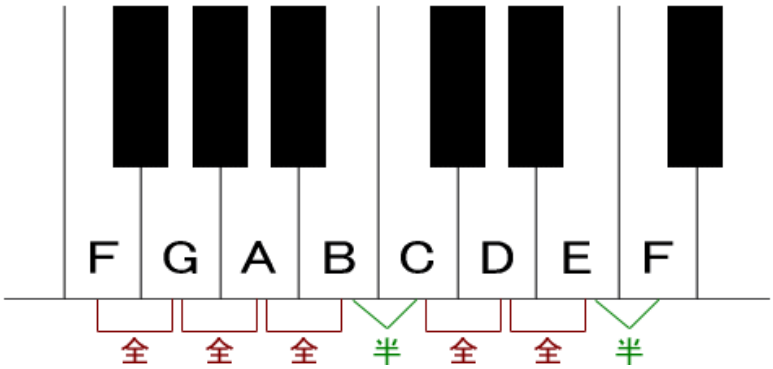
長音階の並びは全音－全音－半音－全音－全音－全音－半音でした。では、どうすれば長音階の並びになるんでしょうか？



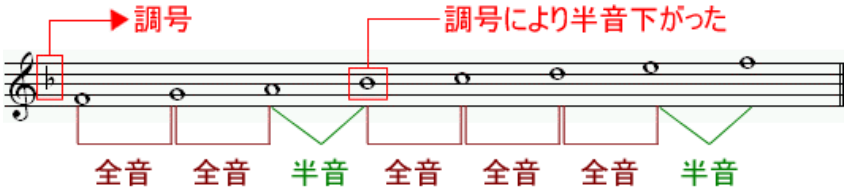
G メジャースケール(ト長調)にするためには、F の音に♯をつけてやります。F♯にすることによって、E と F♯の関係が全音になり、F♯と G の関係が半音になりました。これで長音階の並びになり、G メジャースケールの完成です。C メジャースケールと使う音は違いますが、同じ音の雰囲気がするはずです。調号(ちょうごう)とは、いちいち F の音に♯をつけていては面倒くさいので、音部記号のすぐ右の第5線に♯を記しておきます。そうすると、F の音が何オクターブ上がろうが下がろうが♯はついたままです。

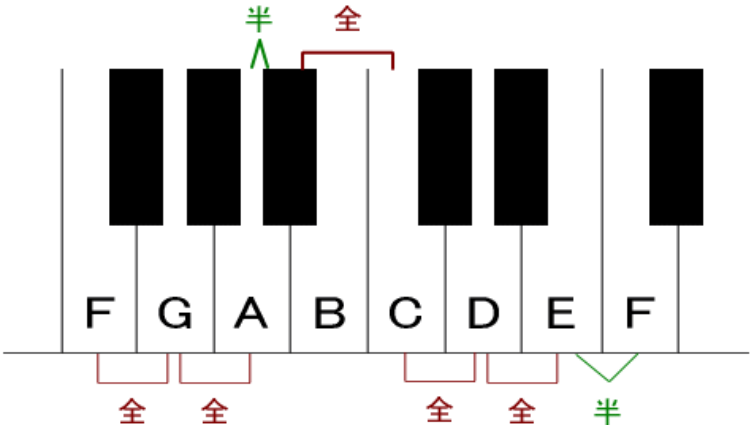
F メジャースケール





次は F メジャースケール（ヘ長調）を作っていきましょう。やはり、F から順番に白鍵を弾くだけでは長音階の響きはしません。同じように、調号で長音階の並びの全音－全音－半音－全音－全音－全音－半音にしてやります。先ほどは♯を使いましたが、今度は♭を使う必要があります。どうすれば長音階の並びになるか、考えていきましょう。





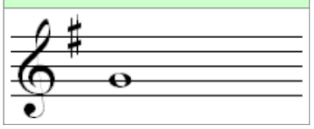
調号で第3線の B に♭をつけると、A と B♭の関係が半音になり、B♭と C の関係が全音になります。こんなふうにして長音階の全音－全音－半音－全音－全音－全音－半音の並びを覚えておけば、どの音を主音としても長音階を作ることができます。先ほどもやったように、調号では♯のつく長音階と♭のつく長音階があります。次のページにまとめたので確認しておいてください。

♯と♭の調号

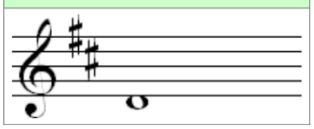
キーを決定づけるのが主音であり調号(ちょうごう)です。♯がつく調号が7つあり、♭がつく調号も7つあります。キーが同じになる調号もあります。♯は日本語で嬰(えい)、♭は変(へん)と言います。

♯の調号

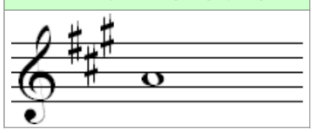
Gメジャー（ト長調）



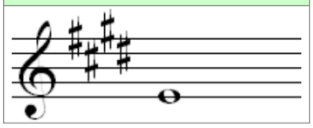
Dメジャー（二長調）



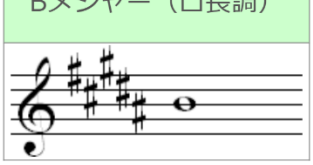
Aメジャー（イ長調）



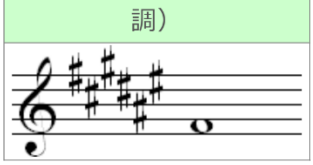
Eメジャー（ホ長調）



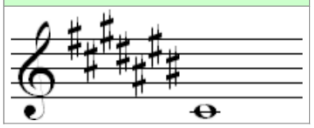
Bメジャー（ロ長調）



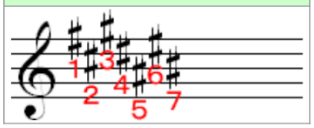
F♯メジャー（嬰ヘ長調）



C♯メジャー（嬰ハ長調）

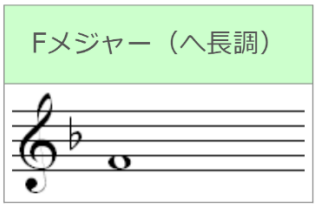


♯の順番

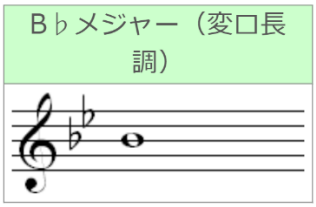


♭の調号

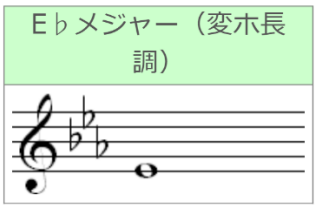
Fメジャー（ヘ長調）



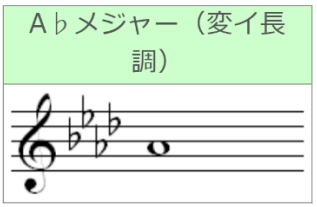
B♭メジャー（変ロ長調）



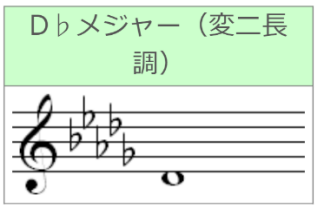
E♭メジャー（変ホ長調）



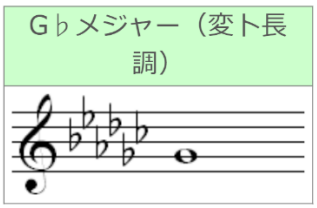
A♭メジャー（変イ長調）



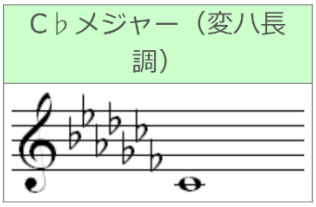
D♭メジャー（変二長調）



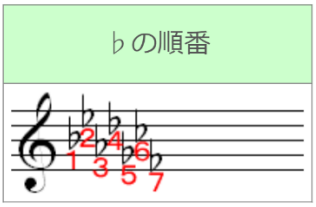
G♭メジャー（変ト長調）



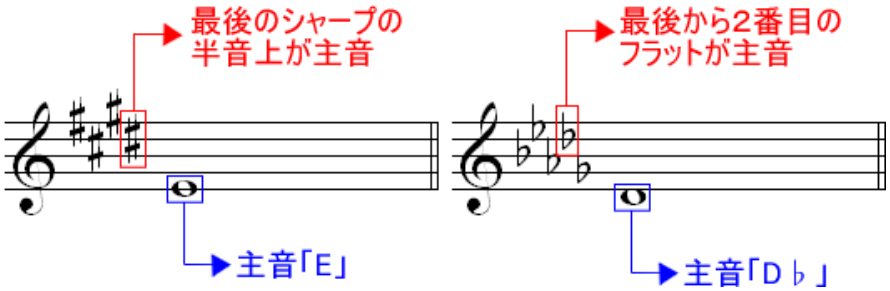
C♭メジャー（変ハ長調）



♭の順番



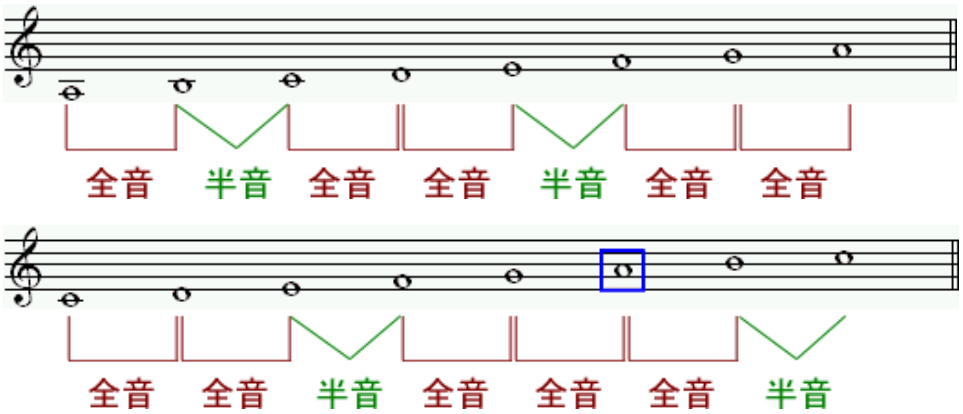
キーの見つけ方



♯と♭の調号を全て覚えてしまえば問題ないのですが、中々全て覚えるのは難しいものです。♯や♭がややこしくて何のキーか分からない時は、僕が音楽学校で教えてもらった次の方法を試してみてください。♯の調号だと、最後に書いた♯の半音上が主音になります。♭の調号だと、最後から2番目に書いた♭が主音になります。よかったら参考にしてください。

短音階(マイナースケール)の並び

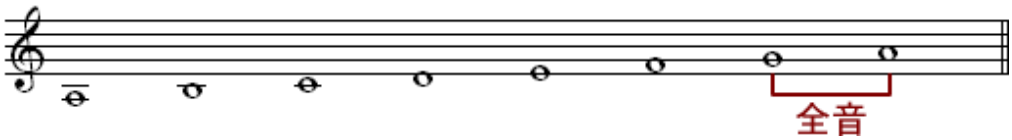
長音階とは反対に暗くて悲しい響きを持った短音階(たんおんかい)を見ていきましょう。短音階も英語でマイナースケールと言われることの方が多いようです。短音階には3種類あって、それぞれ違った特徴を持っています。まずは基本となる自然的短音階(しぜんてきたんおんかい)、英語ではナチュラルマイナースケールを見ていきましょう。



短音階にも全音と半音の決まった並びがあります。全音－半音－全音－全音－半音－全音－全音が短音階の並びです。ここで少し長音階のことを思い出してみましょう。長音階で調号が何もつかなかったのは C メジャースケール(ハ長調)でした。A ナチュラルマイナースケール(イ短調)にも♯や♭の調号はつきません。見比べてみると分かりますが、この2つのスケールは全く同じ音で作られています。C メジャースケールの□の第6音から始まるのが A ナチュラルマイナースケールになります。こういった関係を平行調(へいこうちょう)と言います。調号で同じ♯や♭を持つ長音階と短音階はいつもこの平行調の関係にあります。長音階の第6音から始まるのがナチュラルマイナースケール(自然的短音階)というのを覚えておきましょう。

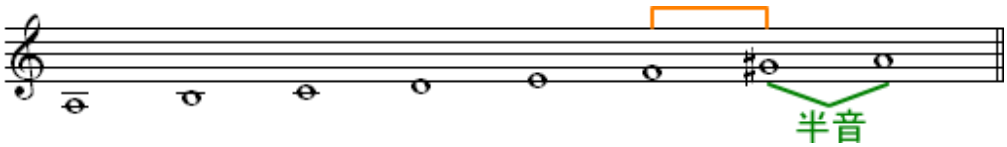
3種類のマイナースケール

A ナチュラルマイナースケール



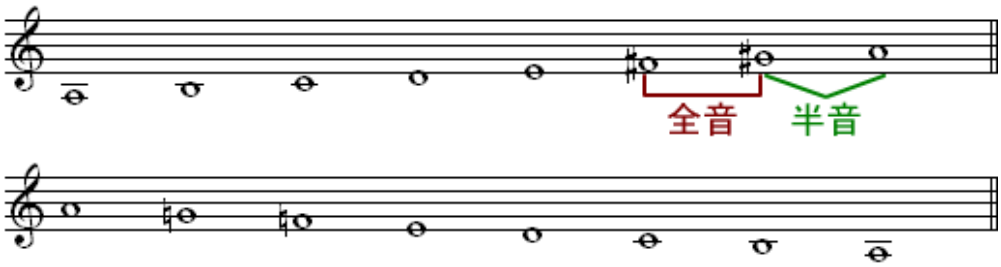
ナチュラルマイナースケール（自然的短音階）はマイナースケール（短音階）の基本です。短音階はその他に2つあります。なぜかと言うと、ナチュラルマイナースケールだけでは表現できないためです。A を主音とする A ナチュラルマイナースケール（イ短調）を聴いてみと、長音階と比べると何か不安定で、どこで終わったのかスッキリしない感じがします。これは音階に問題があるためです。音階は主音で終わるとスッキリするという性格があります。人間の耳がそうインプットされていると言った方がいいかもしれません。主音で終わる前の音が半音だと落ちついた感じがします。しかし、A ナチュラルマイナースケールの第7音と主音は全音の関係です。安定感がなかったのはこのせいだとされています。

A ハーモニックマイナースケール



「では第７音に♯をつけて、第７音と主音の関係を半音にしてしまおう」ということになりました。2つ目の和声的短音階（わせいてきたんおんかい）英語でハーモニックマイナースケールが誕生しました。これで第7音と主音の関係が半音になりました。しかし、第7音に♯をつけたことにより、ひとつ前の第6音と第7音の間が広がってしまいました。

A メロディックマイナースケール



「では、第6音にも♯をつけよう」ということになり、3つ目の旋律的短音階（せんりつてきたんおんかい）英語でメロディックマイナースケールが誕生しました。譜面を見てもらえば分かるように、戻ってくる時は A ナチュラルマイナースケールになるので気をつけましょう。この3つの短音階はどれもよく使われています。どれが良いとかダメとかはないので、この音階を土台として曲を作るときは雰囲気にあった短音階を使いましょう。

♯と♭の平行調

同じ調号を持つ長調と短調は平行調の関係にあることは先ほど説明しました。♯のつく平行調と♭のつく平行調をまとめてみましたので参考にしてください。中には、C♯メジャーと D♭メジャーのように、キーが同じになるものもあるので確認しておきましょう。

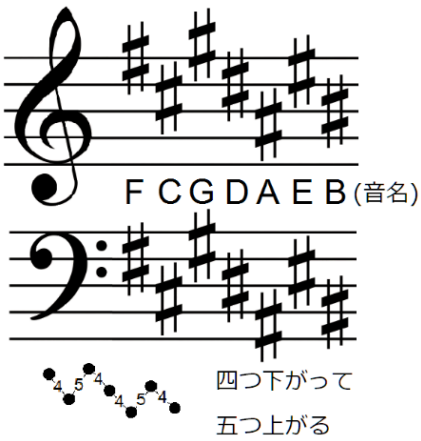
♯	長調	短調
♯×0	Cメジャー（ハ長調）	Aマイナー（イ短調）
♯×1	Gメジャー（ト長調）	Eマイナー（ホ短調）
♯×2	Dメジャー（二長調）	Bマイナー（ロ短調）
♯×3	Aメジャー（イ長調）	F♯マイナー（嬰ヘ短調）
♯×4	Eメジャー（ホ長調）	C♯マイナー（嬰ハ短調）
♯×5	Bメジャー（ロ長調）	G♯マイナー（嬰ト短調）
♯×6	F♯メジャー（嬰ヘ長調）	D♯マイナー（嬰二短調）
♯×7	C♯メジャー（嬰ハ長調）	A♯マイナー（嬰イ短調）

♭	長調	短調
♭×0	Cメジャー（ハ長調）	Aマイナー（イ短調）
♭×1	Fメジャー（ヘ長調）	Dマイナー（二短調）
♭×2	B♭メジャー（変ロ長調）	Gマイナー（ト短調）
♭×3	E♭メジャー（変ホ長調）	Cマイナー（ハ短調）
♭×4	A♭メジャー（変イ長調）	Fマイナー（ヘ短調）
♭×5	D♭メジャー（変二長調）	B♭マイナー（変ロ短調）
♭×6	G♭メジャー（変ト長調）	E♭マイナー（変ホ短調）
♭×7	C♭メジャー（変ハ長調）	A♭マイナー（変イ短調）

0 ♯ or ♭ ⇒C Key (Scale)

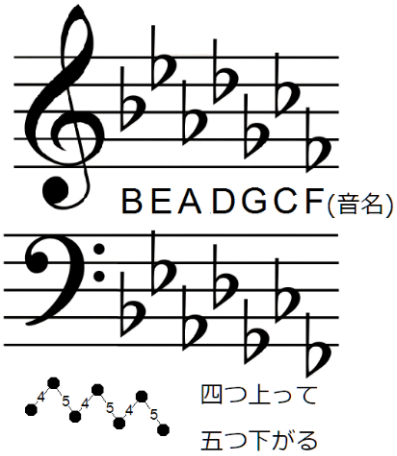
1 ♯ ⇒G
2 ♯ ⇒D
3 ♯ ⇒A
4 ♯ ⇒E
5 ♯ ⇒B
6 ♯ ⇒F ♯
7 ♯ ⇒C ♯

5つずつ上がります

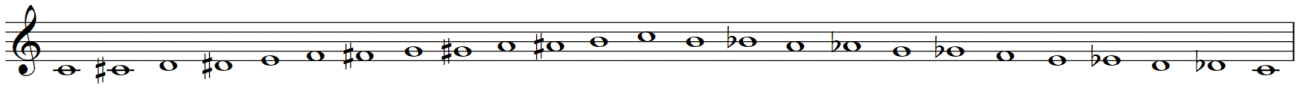


1 ♭ ⇒F Key (Scale)
2 ♭ ⇒B ♭
3 ♭ ⇒E ♭
4 ♭ ⇒A ♭
5 ♭ ⇒D ♭
6 ♭ ⇒G ♭
7 ♭ ⇒C ♭

4つずつ上がります



半音階(chromatic scale クロマティック・スケール)

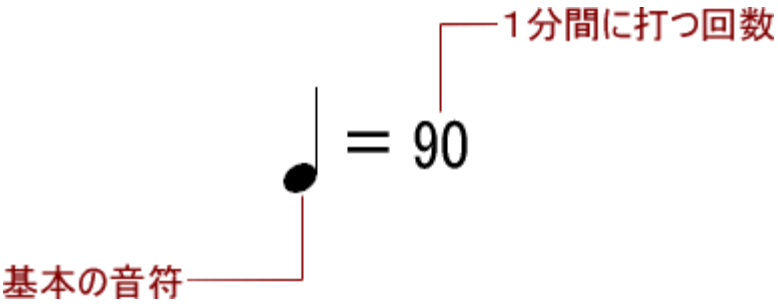


do di re ri mi fa fi sol si la li ti do ti te la le sol se fa mi me re ra do

長音階(メジャースケール)表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	A	B	C♯	D	E	F♯	G♯	A	B	C♯	D	E	F♯
A♭	A♭	B♭	C	D♭	E♭	F	G	A♭	B♭	C	D♭	E♭	F
B	B	C♯	D♯	E	F♯	G♯	A♯	B	C♯	D♯	E	F♯	G♯
B♭	B♭	C	D	E♭	F	G	A	B♭	C	D	E♭	F	G
C	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	A
C♯	C♯	D♯	E♯	F♯	G♯	A♯	B♯	C♯	D♯	E♯	F♯	G♯	A♯
D	D	E	F♯	G	A	B	C♯	D	E	F♯	G	A	B
D♭	D♭	E♭	F	G♭	A♭	B♭	C	D♭	E♭	F	G♭	A♭	B♭
E	E	F♯	G♯	A	B	C♯	D♯	E	F♯	G♯	A	B	C♯
E♭	E♭	F	G	A♭	B♭	C	D	E♭	F	G	A♭	B♭	C
F	F	G	A	B♭	C	D	E	F	G	A	B♭	C	D
F♯	F♯	G♯	A♯	B	C♯	D♯	E♯	F♯	G♯	A♯	B	C♯	D♯
G	G	A	B	C	D	E	F♯	G	A	B	C	D	E
G♭	G♭	A♭	B♭	C♭	D♭	E♭	F	G♭	A♭	B♭	C♭	D♭	E♭

速度を表す記号



これも記号のひとつでメトロノーム記号と言います。メトロノームとは正確なタイムを計る機械です。カチカチと振り子のようなものもあれば、ピッピッピと音が鳴るカードタイプのものもあります。メトロノーム記号は1分間に基本の音符が何回打つかを表示していて、上のメトロノーム記号は「1分間に4分音符が約90回打つ速度です」というのを表しています。基本の音符は2分音符になったり、8分音符にもなったりします。

記号	読み	意味
Grave	グラーベ	重々しく
Largo	ラルゴ	すごく遅く
Lento	レント	遅く
Adagio	アダージョ	ゆるやかに
Andante	アンダンテ	歩く速さで
Andantino	アンダンティノ	少し速めに
Moderato	モデラート	中くらいの速さで
Allegretto	アレグレット	やや速く
Allegro	アレグロ	速く
Vivace	ビバーチェ	快速に
Presto	プレスト	すごく速く

速度を指示する記号はメトロノーム記号だけではありません。イタリア語を使った言葉による指示もあり、メトロノーム記号と一緒に使われることもあります。一度に全て覚える必要はありませんが、上の表でどんなものがあるか目を通しておきましょう。

記号	読み	意味
accelerando (accel.)	アッチェレランド	だんだん速く
ritarando (rit.)	リタルダンド	だんだん遅く

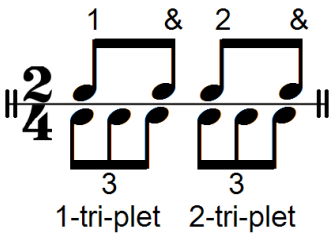
曲中にテンポを変えたい時に使う記号もあります。曲が盛り上がってきたらだんだん速くしたり、曲の最後はゆっくり終わりたい時などに使います。

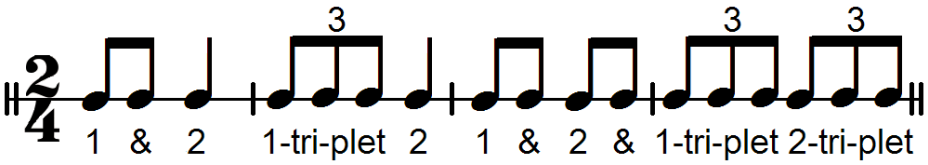
連符

連符(れんぷ)とは、1つの音符を3つや5つや7つなどに均等に分けることです。連符にもいくつかありますが、ここではよく出てくる2種類の連符を見ていきましょう。

1拍3連

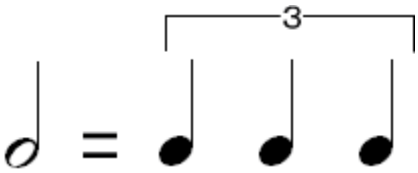
1拍3連は4分音符を均等に3つに分けた音符です。4分音符が1つ鳴っている間に均等に3つ音を鳴らせば1拍3連の出来上がりです。





2拍3連

連符でもうひとつよく出てくるのがこの2拍3連(にはくさんれん)です。2拍3連は2分音符を均等に3つに分けた音符です。

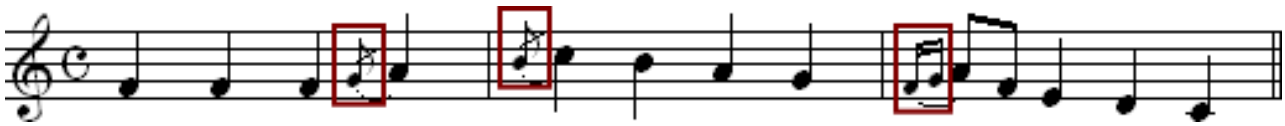


装飾音

音符にアレンジを加えてやるものを装飾音（そうしょくおん）と言います。

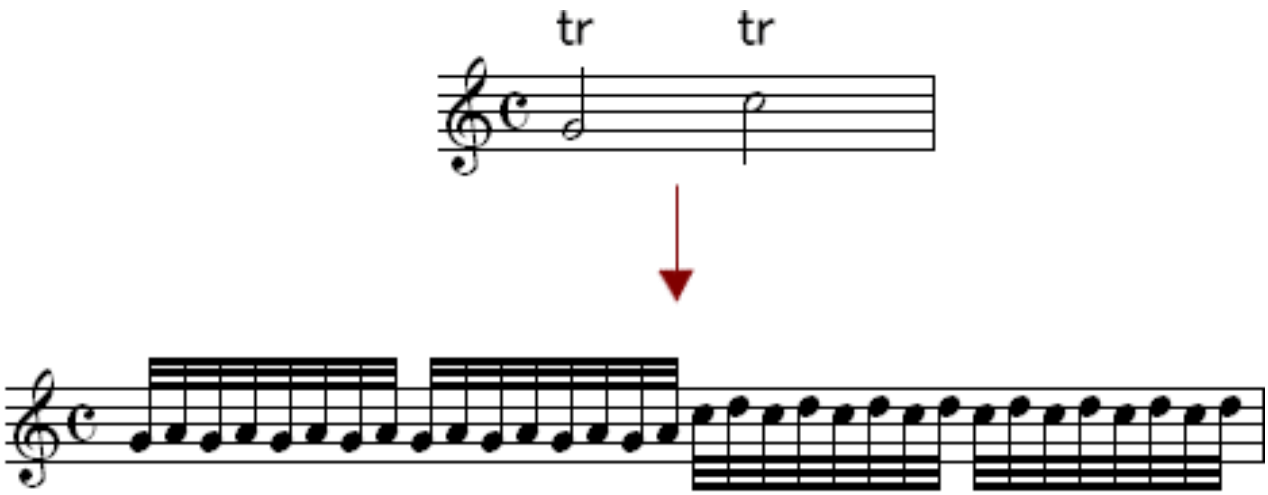
前打音

前打音（ぜんだおん）とは□のように、音符の前に小さな音符を付けた音です。



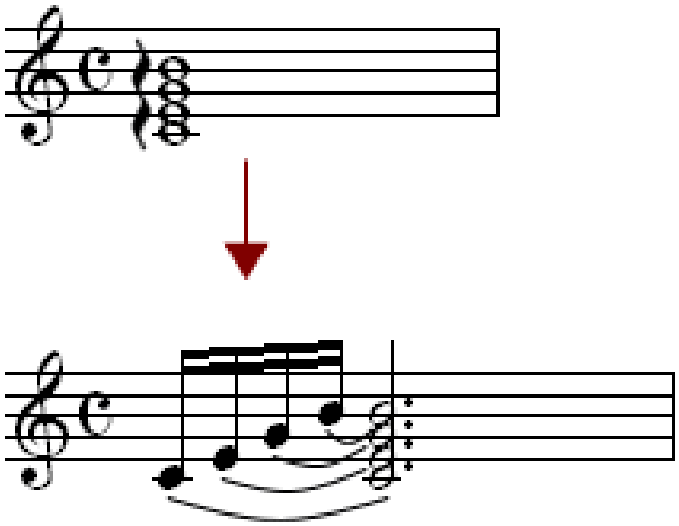
トリル

トリルは書かれている音符と、その1音上の音を交互に速く演奏して、
波状の音を出す演奏方法です。トリルのスピードは人それぞれでいいと思います。
記号は音符の上に tr と書きます。



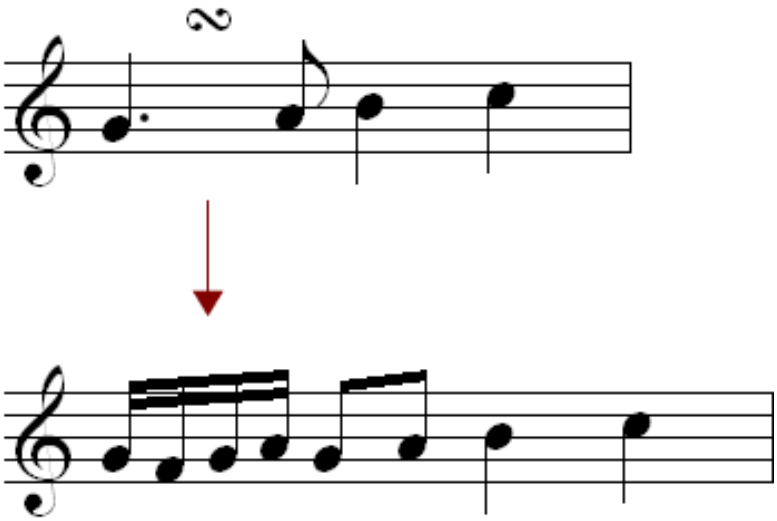
アルペジオ

アルペジオは和音（コード）を1音ずつ素早く鳴らしながら演奏します。
ギタリストが弾くコード弾きと同じです。



ターン

ターンは元になる音符をとなり合う音で取り囲んで演奏します。
回音（かいおん）とも言われます。



音の強弱を表す記号

記号	読み	意味
ppp	ピアニッシッシモ	ものすごく弱く
pp	ピアニッシモ	すごく弱く
p	ピアノ	弱く
mp	メゾピアノ	やや弱く

記号	読み	意味
mf	メゾフォルテ	やや強く
f	フォルテ	強く
ff	フォルティッシモ	すごく強く
fff	フォルティッシッシモ	ものすごく強く

演奏する小節には強く弾いたり、弱く弾いたりする箇所があります。それを指示する記号も何種類かあります。どのくらい強弱をつけるのかを指示したのが上の強弱記号です。こういった記号はロックやポップスよりクラシックの譜面でよく見られると思います。

スフォルツァンド	スフォルツァード	フォルツァード	アクセント
sf	sfz	fz	＞ ∧

スフォルツァンド・スフォルツァード・フォルツァート・アクセントはフォルテ系の仲間になります。これらの記号があったら、さらに強く演奏してください。これらもクラシックによく見られる記号で、邦楽や洋楽ではあまり使う機会がないと思います。バンドスコアでも稀にしか出てこないでしょう。

記号		読み	意味
cresc.	<	クレッシェンド	だんだん強く
decresc.	>	デクレッシェンド	だんだん弱く

強弱記号の中には少しずつ変化をつけるものがあります。クレッシュエンドはだんだん強く、デクレッシェンドはだんだん弱くなります。記号は文字のcresc.decresc.と＜＞がありますが、どちらでも好きな方を使いましょう。